張籍詩訳注（10）
――「各東西」「節婦吟」――

畑村　学
橘　英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote（10）

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

訳注

本篇には、19「各東西」・20「節婦吟」（ともに中華書局『張籍詩集』巻一）の訳注を掲載する。

19各東西

【題解】

東西別々の方向に旅立っていく二人の旅人の別れを詠じた内容。「各東西」は、1、2句「遊人別、一東復一西」の言葉を用いて詩題としたもの。

『楽府詩集』巻九五に新題楽府辞として収録され、張籍のこの詩のみ収められている。『全唐詩』巻三八二の題注に、「一本此下有『言』字」と言い、その場合の詩題は、「各東西言」となる。

「東西」は古くから用例がある。「各東西」の三字の並びでは、詩では梁の到溉らの「儀賢堂監策秀才聯句」（『古詩紀』巻一〇二）に見えるが（「来彦各東西、翼亮更出内」。担当者未詳）、この場合、賢才たちが東西に居並ぶという意味であり、ここと意味が異なる。

唐詩では、初唐の李嶠「送李邕」（『全唐詩』巻五八）に、「殷勤御溝水、従此各東西」（殷勤たり　御溝の水、此従り各おの東西す）と送別の詩で使われており、ここと共通する。また、張籍より少し前の詩人司空曙の「歳暮懐崔峒耿湋」（『全唐詩』巻二九三）には、「洛陽旧社各東西、楚国遊人不相識」（洛陽の旧社　各おの東西するも、楚国の遊人　相識らず）と、詩題の崔峒と耿湋の二人が散り散りに去っていったことを「各東西」と表現しており、かつ張籍の第1句に出てくる「遊人」（司空曙自身）も使われている。

杜甫には一例見え、有名な「三別」の一つ「無家別」（『詳注』巻七）に、「寂寞天宝後、園廬但蒿藜。吾里百餘家、世乱各東西」（寂寞たり　天宝の後、園廬には　但だ蒿藜。吾が里　百餘家なりしも、世乱れて　各おの東西す）と、戦乱を逃れる人々の様子を表現している。『詳注』は、謝朓の「拝中軍記室辞隋王牋」（『文選』巻四〇）に、「岐路東西、或以歔嘘」（岐路　東

二〇〇三年十二月十七日（受理）

畑村　学　宇部工業高等専門学校一般科助教授
橘　英範　岡山大学文学部言語文科学科助教授

西なれば、或いは以て歔唏（おおう）す）とあるのを引いている。

張籍の用例はこの一例のみであるが、「東西」であれば数例見える。316「感春」（巻六）に、「遠客悠悠任病身、謝家池上又逢春。明年各自東西去、此地看花是別人」（遠客悠悠として　病身に任せ、謝家の池上　又春に逢う。明年　各自　東西に去り、此の地　花を看るは是れ別人）とある「各自東西去」は、「各東西」を五字に引き延ばした表現。

なお、張籍と交流の深かった王建の別れのうた「別曲」（『全唐詩』巻三〇一）に、「馬頭対哭各東西、天辺柳絮無根蔕」（馬頭　哭に対して各おの東西す、天辺の柳絮　根蔕無し）と見える。

別離の場面を詠じた張籍の詩（楽府）には、11「送遠曲」、14「別離曲」（ともに巻一）、436「送遠曲」（巻七）があるが、そのなかで「各東西」は、旅人同士の別れをテーマとしている点で特徴的である。徐注の題解には、11「送遠曲」が主人が客を送る詩であり、この詩は旅人同士の別れを詠った詩であると言う。

【本文・書き下し文】

1 遊人別　　遊人　別れ
2 一東復一西　　一は東し　復た一は西す
3 出門相背兩不返　　門を出でて相背き　両つながら返らず
4 惟信車輪與馬蹄　　惟だ車輪と馬蹄とに信（まか）すのみ
5 道路悠悠不知處　　道路悠悠（ひひ）として　処を知らず
6 山高海闊誰辛苦　　山高く海闊くして　誰か辛苦する
7 遠遊不定難寄書　　遠遊定まらず　書を寄せ難し
8 日日空尋別時語　　日日空しく尋ぬ　別時の語
9 浮雲上天雨墮地　　浮雲　天に上りて　雨　地に墮つ
10 暫時會合終離異　　暫時の会合　終（つい）に離異（りい）す
11 我今與子非一身　　我　今　子と一身に非ず
12 安得死生不相棄」　　安んぞ　死生　相棄てざるを得んや

【口語訳】

1 旅人同士が別れることになり
2 一人は東に　一人は西に向かった
3 門を出て背を向けあったら　二人とも戻ってくることはなく
4 ただ　車と馬に身を任せるだけだ
5 道は延々と続き　相手の居場所もわからない
6 山は高く海は広く　辛い思いをしているのはだれであろうか
7 遠い旅で身は定まらず　手紙を送るのは難しく
8 毎日あてどなく考えるのは　別れの際に交わした言葉だ
9 ただよう雲が天に上り　雨が地上に落ちるように
10 わずかな間の仲むつまじい出会いも　結局は離れ隔たってしまうのだ
11 私は　今　あなたと一つ身ではない
12 どうして生死をともにと願う関係を断ち切らないでおられようか

【押韻】

西・蹄―上平一二斉
処・語―上声八語、苦―上声一〇姥（通押）
地・棄―去声六至、異―去声七志（同用）

【語釈】

1・2　遊人別、一東復一西

〔遊人〕旅人。「遊」は7句「遠遊」の遊であり、ここでは「遊子」と同じような意味で用いられている。

六朝以前の古い用例は見られず、六朝詩では、柳惲「擣衣詩」（『玉臺新詠』巻五）に、「行役滞風波、遊人淹不帰」（行役　風波に滞り、遊人　淹として帰らず）とあるのが早い例の一つ。

唐詩には多くの用例があり、有名な孟浩然「送朱大入秦」（『全唐詩』巻一六〇）に、「遊人武陵去、宝剣直千金」（遊人　武陵を去り、宝剣　直　千金）とある（ただし、『唐詩選』所収のものは「作武陵」を「作五陵」、五陵に去るに作り、一般にはこちらで知られている）。

杜甫には用例がない。張籍にこの他四例。ここと同じく別離を詠じた160「春日留別」（巻二）に、「遊人欲別離、酔復対花枝」（遊人　別離せんと欲し、酔いて復た花枝に対す）とある。

〔一東復一西〕二人の旅人のうち、一人は東に一人は西にと、全く反対の方向に旅立って行く。

古く『荘子』天運に、「風起北方、一西一東、有上彷徨」（風は北方に起こり、一（あるい）は西し一（あるい）は東し、上りて彷徨する有り）と類似した表現があるが、この場合、風が西に東に吹く様子を言い、意味は異なる。

六朝の詩では、謝朓「金谷聚」（『玉臺新詠』巻一〇）に、「車馬一東西、別後思今夕」（車馬　一たび東西せば、別後　今夕を思わん）とある。張籍の4句と同じく「車馬」が出てくること、東西別々に去っていくこと、別れの詩であることで類似する。また、沈約「送別友人」（『藝文類聚』巻二九）に、「君東我亦西、銜悲涕如霰」（君は東し　我も亦た西す、悲しみを銜んで涕（なみだ）　霰の如し）とあり、東と西を用いて、一句の中で別れを対照的に描いている点でここと共通する。

唐詩にも類似した表現はいくつかあるが、岑参「送王著作赴淮西幕府」（『全唐詩』巻一九八）に、「燕子与百労、一西復一東」（燕子と百労と、一は西し　復た一は東す）と、二羽の鳥に準えて「王著作」との別れを詠ずるなかで、張籍の「東」「西」を入れ替えただけの全く同じ構造の句が見える。

二人の人物が正反対の方向に向かうという表現は、李陵の作として伝えられる「贈蘇武別」（『藝文類聚』巻二九）にも、「爾行西南遊、我独東北翔」（爾行きて　西南に遊び、我独り　東北に翔ける）など古くから見える。

以上冒頭の二句では、二人の旅人が、東西正反対の方向に旅立っていくことを詠じている。

3・4　出門相背両不返、惟信車輪与馬蹄

〔出門〕門を出て出発する。単なる描写ではなく、別離のイメージを伴う語である。14「別離曲」の【語釈】参照。

〔信〕車や馬の進みに任せてとぼとぼと進む。二人の旅人の別れがたい気持ちを象徴的に表す。

「信」を「まかす」の意味で解釈する用法は古くからあるが、張籍のここのように、乗り物に身を任せるといった表現は、詩では唐代に入ってから見られるようになる。

盛唐の高適「送裴別将之安西」（『全唐詩』巻二一四）には、「絶域眇難躋、悠然信馬蹄」（絶域　眇として躋（のぼ）り難く、悠然として馬蹄に信す）と、送別詩のなかで「馬蹄に信す」という表現が見える。また、張籍と親交のあった白居易の「長恨歌」には、長安にしょんぼりと戻る玄宗の様子を「馬に信せて帰る」と表現している他、多くの用例がある。韓愈にも「遊城南十六首」の「嘲少年」（『繫年集釈』巻九）に、「秖知閑信馬、不覚誤随車」（秖（ただ）知る　閑かに馬に信すを、覚えず　誤りて車に随うを）とあり、馬と車を対比した表現が見える。こうした「信」の用法は、中唐の頃には広く使われるようになっている。

張籍自身の「信馬」「信車」の用例はこの一例のみ。

〔車輪〕車輪。旅人が乗る車を指す。古くから用例のある言葉で、曹操「苦寒行」（『文選』巻二七）には、「羊腸坂詰屈、車輪為之摧」（羊腸　坂　詰屈（きっくつ）し、車輪　之が為に摧（くだ）かる）とあり、旅の困難さを詠うなかで使われている。陳注は、曹植「鞈舞歌五首・聖皇篇」（『宋書』楽志四）に、「車輪為裴回、四馬躊躇鳴」（車輪　為（ため）に裴回し、四馬　躊躇して鳴く）とあるのを引く。車と馬が対比されており、陳注が指摘する理由もここにあるのだろう。

唐詩にも用例が多く、例えば、曹操「苦寒行」を模した李白「北上行」（王琦注本巻五）には、「馬足蹶側石、車輪摧高崗」（馬足　側石に蹶（つまず）き、車輪　高崗に摧（くだ）く）とあり、車輪と馬足が対になっている。

杜甫には一例。「偶題」（『詳注』巻一八）に、「車輪徒已斷、堂構惜仍虧」（車輪　徒らに已に斷（たく）す、堂構　仍お虧（か）けたるを惜しむ）とある。

張籍の用例はこの一例のみ。

〔馬蹄〕馬のひづめ。もう一方の旅人が乗る馬を指す。「車輪」と同じく古くから用例のある言葉で、曹植「白馬篇」（『文選』巻二七）には、「仰手接飛猱、俯身散馬蹄」（手を仰（かざ）して飛猱に接し、身を俯して馬蹄を散らす）という表現が見える。

唐詩にも頻出し、陳注は、張謂「送裴侍御帰上都」（『全唐詩』巻一九七）に、「江月随人影、山花趁馬蹄」（江月　人影に随い、山花　馬蹄を趁（お）う）とあるのを引いている。

杜甫にも数例見え、「陪鄭広文遊何将軍山林十首」其一（『詳注』巻二）には、「平生為幽興、未惜馬蹄遥」（平生　幽興を為し、未だ馬蹄の遥かなるを惜しまず）とあり、『詳注』は、蘇伯玉の妻の「盤中詩」（『玉臺新詠』巻九）に、「家居長安身在蜀、何惜馬蹄帰不数」（家は長安に居りて身は蜀に在り、何ぞ馬蹄を惜しんで帰ること数しばせざる）とあるのを引く。

張籍には、別れの歌である14「別離曲」（巻一）の第2句「幾時更踏門前路」が、一に「馬蹄幾時踏門路」（馬蹄　幾時か門路を踏む）に作り、また、374「逢賈島」（巻六）に、「十二街中春雪遍、馬蹄今去入誰家」（十二街中春雪遍く、馬蹄今去りて　誰が家にか入る）とある他、四例見える。

この二句では、二人の旅人の行動を客観的に描写することで、別れがたい気持ちを間接的に詠じている。

以上の1～4の四句が一韻で、ひとまとまりとなっている。二人の旅人の別れの場面を両者の行動を中心に詠じている。ここに見られる詩語や句法は、

離別の詩によく使われるものであり、冒頭から別れの詩であることを明確に打ち出している

5・6　道路悠悠不知処、山高海闊誰辛苦

〔道路〕二人の旅人がこれから通る道。古くから用例のある言葉で、陳注は「古詩十九首」其一（『文選』巻二九）に、「道路阻且長、会面安可知」（道路　阻しくして且つ長し、会面　安んぞ知るべけん）とあるのを引いている。唐詩に頻出し、杜甫にも多くの用例がある。その一例、「遣興三首」其一（『詳注』巻六）に、「我今日夜憂、諸弟各異方。不知死与生、何況道路長」（我今　日夜憂え、諸弟　各おの方を異にす。知らず　死と生と、何ぞ況んや　道路の長きをや）とあるのは、離ればなれになっている自分と兄弟たちとの距離の遠さを言う。

張籍にこの他三例。うち、454「南帰」（巻七）に、「促促念道路、四支不常寧」（促促として道路を念い、四支　常には寧かならず）とあるのは、故郷までの遠い道のりを指している。

〔悠悠〕道が遥かに続くさま。古くから詩に常見の語。陳注では、『毛詩』鄘風「載馳」に、「駆馬悠悠、言至于漕」（馬を駆ること悠悠、言に漕に至らん）とあるを引く。

杜甫にも用例が多く、うち「発秦州」（『詳注』巻八）に、「大哉乾坤内、吾道長悠悠」（大なるかな　乾坤の内、吾が道　長えに悠悠たり）とあるのは、「道」と一緒に使われている例である。

張籍自身の用例も多い。441「懐別」（巻七）に、「古道随水曲、悠悠繞荒村」（古道　水に随いて曲がり、悠悠として荒村を繞る）とあるのは、川に沿って続く「古道」の様子を表現する。

〔不知処〕いったん別れてしまえば、どこにいるかわからない。

唐以前の詩の用例は見当たらない。賦の用例ではあるが、宋玉「神女賦」（『文選』巻一九）に、「闇然而暝、忽不知処」（闇然として暝く、忽ち処を知らず）とあり、神女が姿が消えて行方がわからなくなったことを言う。

唐詩の用例は多い。韋応物「遊龍門香山泉」（『全唐詩』巻一九二）に、「霊草有時香、仙源不知処」（霊草　時に香る有り、仙源　処を知らず）とあるのは、仙界の場所がわからないことをいう。

杜甫には用例がない。張籍もこの一例のみ。

〔山高海闊〕別後の道中の困難さを表現する。陳注は、宋之問「至端州駅見杜五審言沈三佺期閻五朝隠王二無競題壁慨然成詠」（『全唐詩』巻五一）に、「雲揺雨散各翻飛、海闊天長音信稀」（雲揺き雨散じて　各おの翻飛し、海闊く天長くして　音信稀なり）とあるのを引く。詩題の四人（杜審言・沈佺期・閻朝隠・王無競）がみな散り散りに遠く離れてしまったことを言う。宋之問の詩には、張籍の9句に出てくる雲と雨も詠われている（後述）。

〔誰辛苦〕いったい誰が苦しんでいるのだろうか。それは、遠遊を続ける旅人であるあなただ。李建崑注では、「誰辛苦、謂誰知思念之苦也」、相手を思うことの苦しみを誰が知ろうか、という意味で解釈するが、その場合、上の「山高海闊」とどのようにつながるのかよくわからない。

「辛苦」の用例は古くからあるが、「誰」と結びついた例として、陳注は、陸機「贈従兄車騎詩」（『文選』巻二四）に、「翩翩遊宦子、辛苦誰為心」（翩翩たり　遊宦の子、辛苦　誰か心を為めん）を引く。故郷を離れて役人をしている者（遊宦子）は、辛い思いを続けて心安らかにしておれないという内容になる。「遊人」ではないが、張籍の詩と類似した表現である。同様の例は、陸機の表現を踏まえた謝霊運「永初三年七月十六日之郡初発都」（『文選』巻二六）にも、「辛苦誰為情、遊子値頽暮」（辛苦しては誰か情を為さん、遊子は頽暮に値えり）とある。

唐詩にも「辛苦」の用例は多いが、「誰」と結びついたものは、張籍以外に二例。いずれも同時代か後の時代である。白居易「有感三首」其二（二二二八）に、「借問新旧主、誰楽誰辛苦」（借問す　新旧の主、誰か楽しみ　誰か辛苦する）とあるのは、旅の苦しみではないが、三字の並びが張籍と同じ。

杜甫の詩には「辛苦」の用例が十例ほどあり、そのなかに旅の苦労をいう例もいくつかある。「龍門鎮」（『詳注』巻八）に、「不辞辛苦行、迫此短景急」（辞せず　辛苦して行くを、此の短景の急なるに迫る）とあるのもそうした例の一つ。

「辛苦」は、張籍にこの他五例あり、多くは農作業の苦労を言う。ここと同じく旅の苦労を言う例として、32「羈旅行」（巻一）に、「誰能聴我辛苦行、為向君前歌一声」（誰か能く我が辛苦して行くを聴かんや、為に君前に向かいて一声を歌わん）とある。

この二句は、別れの場面を詠じた前の四句に引き続いて別後の様子を言い、道中の困難さと相手の苦労を思いやって詠う。

7・8　遠遊不定難寄書、日日空尋別時語

〔遠遊〕遠く旅に出る。11「送遠曲」（巻一）の【語釈】参照。

〔寄書〕手紙を送る。古くから用例のある言葉。六朝の詩では、魏文帝「燕歌行二首」其二（『宋書』楽志）には、「別日何易会日難、山川悠遠路漫漫。鬱陶思君未敢言、寄書浮雲往不還」（別日　何ぞ易く　会日難き、山川悠遠　路漫漫。鬱陶　君を思いて　未だ敢えて言わず、書を浮雲に寄すれば　往けども還らず）とあり、別後の情を詠うなかに見える。ここには張籍の9句にある「浮雲」も出てくる。

陳注は、杜甫「月夜憶舍弟」（『詳注』巻七）に、「寄書長不達、況乃未休兵」（書を寄するも　長に達せず、況んや乃ち未だ兵を休めざるをや）とあるのを引き、この場合、戦争により音信不通となっていることを言う。「寄書」は、杜甫には全部で五例ある。

張籍にはここ以外にもう一例、127「寄漢陽故人」（巻二）に、「帰使雨中発、寄書燈下封」（帰使　雨中に発し、寄書　燈下に封す）とある。

〔日日空尋別時語〕旅先におけるわずかな時間の出会いであったが、二人は意気投合し、互いにうち解けた。そのため別れた後も、相手のことを思い別れた時に交わした言葉を思い返しながら旅を続けるのである。

「空尋」は、六朝の詩には用例が無く、唐詩では、張籍以前では、魏知古の「玄元観尋李先生不遇」（『全唐詩』巻九一）に、「羽客今何在、空尋伊洛間」（羽客　今　何にか在る、空しく尋ぬ　伊洛の間）とあるのみ。張籍以後では一例を数えるだけである。

杜甫には用例がない。張籍にもこの一例のみ。

この二句、離別後は相手の居場所が分からないため手紙を送ることもできず、別れ際に交わした言葉を反芻するしかないと詠う。前掲謝朓「金谷聚」に、「車馬一東西、別後思今夕」（車馬　一たび東西せば、別後　今夕を思わん）とある、別れた後に別れの場面を思い出すという点で、発想が共通している。

以上の5～8の四句が一韻でひとまとまりになっている。別れの場面を詠った冒頭の四句を受けて、ここでは別後の二人の様子を詠じている。冒頭四句が二人の旅人を客観的に描写するのに対し、ここでは5句に「不知処」、6句に「誰辛苦」といった表現があることから、どちらかの旅人の視点に立って詠われていると判断できる。そして、一方の旅人の立場で詠うということは、すなわち全く同じ状況にあるもう一方の旅人の立場で詠っていることにもなり、結果的にお互いが相手の旅の苦労を思い、お互いが別れの場面を思い出していることになるのである。

9・10　浮雲上天雨墮地、暫時会合終離異

〔浮雲上天雨墮地〕空に上る雲と地に落ちる雨は、わずかな時間同じ場所に留まり、その後反対の方向に離れていくという点で、二人の旅人に準えられている。

同様の表現は、唐以前の詩では、江總「別袁昌州」（『藝文類聚』巻二九）に、「不言雲雨散、更似東西流」（言わず　雲雨散ずと、更に東西に流るるに似たり）とあるのが、雲と雨の比喩で別れを表現している点で類似し、かつこの詩の詩題にある「東西」の語句が用いられている。

唐詩では、前掲宋之問の「至端州駅見杜五審……」に、「雲揺雨散各翻飛、海闊天長音信稀」（雲揺き雨散じて　各おの翻飛し、海闊く天長くして　音信稀なり）とあり、同じく散り散りになる雲と雨が別れを象徴するものとして使われている。

「浮雲」は空に浮かぶ雲。古くから、身を寄せるあてのない旅人に喩えられる。陳注が「古詩十九首」其一（前掲）に、「浮雲蔽白日、遊子不顧反」（浮雲　白日を蔽い、遊子　顧反せず）とあるのを引くのは、後句に「遊子」（旅人）があるためであろう。ただし、太陽を覆うこの「浮雲」は、旅人の心の憂鬱さを象徴する風景と解釈され、旅人自身を直接喩えているわけではないようだ。遠く離ればなれにある人を喩える「浮雲」の例としては、李陵「与蘇武詩三首」其一（『文選』巻二九）に、「仰視浮雲馳、奄忽互相踰」（仰いで浮雲の馳するを視るに、奄忽として互いに相踰ゆ）とあるのが古い例のうちの一つ。

唐詩にも同様の用例は多く、有名な李白「送友人」（王琦注本巻一八）に、「浮雲遊子意、落日故人情」（浮雲　遊子の意、落日　故人の情）とあるのは、まさに張籍と同じく旅人の象徴として用いられている。

杜甫にも多くの用例があり、先の李白の詩を踏まえた「夢李白二首」其二（『詳注』巻七）には、「浮雲終日行、遊子久不至」（浮雲　終日行り、遊子久しく至らず）とある。

張籍にはこの一例のみ。

〔暫時〕非常に短い時間。唐代以前の詩の用例は少ない。費昶「和蕭洗馬画屏風二首」其二「秋気涼風起」（『玉臺新詠』巻六）に、「紅顔本暫時、君還詎相及」（紅顔　本より暫時、君還るも　詎ぞ相及ばん）とあるのは、その少ない例の一つで、夫がいない間、美貌があっという間に衰えてしまうと詠

うなかに見える。

杜甫に四例。うち「送殿中楊監赴蜀見相公」（『詳注』巻一五）に、「人生在世間、聚散亦暫時」（人生きて　世間に在り、聚散　亦暫時なり）とあり、人と集まったり離れたりするのはわずかな時間だといい、張籍の詩と類似する。

張籍にこの他一例、290「送元宗簡」（巻六）に、「暫時相見還相送、卻閉閑門依旧愁」（暫時相見て　還た相送る、卻って閑門を閉じて旧愁に依る）とあるのもこと似た表現。

〔会合〕会って仲むつまじくすること。古くから用例のあることばで、陳注は、曹植「七哀詩」（『文選』巻二三）に、「浮沈各異勢、会合何時諧」（浮沈各おの勢を異にす、会合　何れの時にか諧わん）とあるのを引く。この場合、男女（夫婦）の会合について言う。

杜甫には三例あり、いずれも会っている時間の短さ、会合の回数の少なさを言う。そのうち「冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復帰劉顥宅宿宴飲散因為酔歌」（『詳注』巻六）には、「人生会合不可常、庭樹雞鳴涙如霰」（人生の会合　常にすべからず、庭樹の雞鳴　涙　霰の如し）とある。

張籍はこの一例のみ。

〔離異〕離れ隔たる。『楚辞』九章「惜誦」に、「終危独以離異兮、曰君可思而不可恃」（終に危独にして以て離異するか、曰く　君は思うべくして恃むべからず）とあり、君（君王）から離れ背くことを言う。六朝詩の用例は三例のみ。陳注の引く潘岳「在懐県作詩二首」其二（『文選』巻二六）に、「眷然顧鞏洛、山川邈離異」（眷然として鞏洛を顧みれば、山川　邈かにして離異す）とあるのは、故郷の山川から遠く離れることを言う。李善注は先の『楚辞』九章「惜誦」を引く。

唐代には張籍のここ以外に二例、孟浩然と清昼の詩に見えるのみである。孟浩然の「書懐貽京邑同好」（『全唐詩』巻一五九）に、「秦楚邈離異、翻飛何日同」（秦楚　邈かにして離異し、翻飛　何れの日にか同じからん）とあるのは、潘岳の詩の表現を踏まえている。

この二句は、二人が親交を深めたのはわずかの間であり、別れた後は二度と再会することはないことを、天に上る雲と地に落ちる雨に喩えて詠う。

11・12　我今与子非一身、安得死生不相棄

〔我今与子非一身〕私は今、あなたとは一つ身ではない。

「我今」の字の並びでは、六朝詩に用例が少ない。陸機「順東西門行」（『楽府詩集』巻三七）に、「桑枢戒、蟋蟀鳴、我今不楽歳聿征」（桑枢　戒むるも、蟋蟀鳴き、我　今　楽しまずんば　歳は聿に征かん）とあるのは、少ない例のなかの一つ。

唐詩の用例は多く、杜甫にも三例ある。うち「遣興三首」其一（『詳注』巻六）に、「我今日夜憂、諸弟各異方。不知死与生、何況道路長」（我今　日夜憂う、諸弟　各おの方を異にす）とあり、諸弟と離ればなれになっている「今」を限定している。

張籍にはこの一例のみ。

「非一身」は、同じ一つの体ではないこと。蘇武「詩四首」其一（『文選』巻二九）に、「況我連枝樹、与子同一身」（況んや　我　連枝の樹にして、子と一身を同じうするをや）とあるのは、同じ親から生まれた兄弟に対して「同一身」と言っているようだ。意味は張籍とは反対であるが、一句の構造は同じである。

明の謝榛が『四溟詩話』で言うように（李建崑校注に指摘）、同様の表現は、秦嘉の妻・徐淑が夫に答えた書簡（『藝文類聚』巻三二）に、「身非形影。何得動而輒俱。体非比目。何得同而不離」（身は形影に非ず。何ぞ動きて輒ち俱にするを得ん。体は比目に非ず。何ぞ同じくして離れざるを得ん）、私とあなたは形と影とは違うので、一緒に動くことはできない。二匹並んで泳ぐ比目魚とは異なるので、離れないと言うわけにはいかないと述べるなかに見える。ここでは男女の関係について言う。

「非一身」の用例は、張籍以外には見られないが、「一身」だけであれば多くの用例がある。同じく謝榛が指摘する劉希夷「公子行」（『全唐詩』巻八二）には（ただし、謝榛は駱賓王の詩とする）、「与君相向転相親、与君双棲共一身」（君と相向いて　転た相親しみ、君と双棲して　一身を共にせん）とあり、美しい女性にあった公子の願いを記すなかに「共一身」と見える。

〔安得死生不相棄〕死ぬも生きるも一緒、というわけにはいかない。君と同じ体（一身）であれば生死を共にすることができるが、互いに遠遊の旅人であるため、せっかく結ばれた深交も破棄しないわけにはいかないのだ。

「死生」は、生と死。古くから用例のある言葉で、『毛詩』邶風「擊鼓」に、「死生契闊、与子成説」（死生契闊、子と説びを成す）とあり、鄭箋に基づいて解釈すれば、兵士同士が、生きるも死ぬも最後まで互いに助け合おうと約束する言葉となる。陳注引く『論語』顔淵篇には、「死生有命、富貴在天」（死生　命有り、富貴　天に在り）とあり、これは人の生死は天命で

あるという意味。

詩においても古くから用例がある。杜甫には七例あり、「月夜憶舍弟」（前掲）に、「有弟皆分散、無家問死生」（弟有り　皆分散し、家の死生を問う無し）とあるのは、死んでいるか生きているかわからないという意味である。

張籍にこの他もう一例。161「没蕃故人」（巻二）に、「蕃漢断消息、死生長別離」（蕃漢　消息を断ち、死生　長えに別離す）とあり、吐蕃に遠征した友人の消息が途絶え、生死もわからないまま永遠の離別となったことを詠っている。

〔相棄〕見捨てる。関係を切る。陳注は、鮑照「詠史詩」（『文選』巻二一）に、「君平独寂寞、身世両相棄」（君平　独り寂寞たり、身世　両つながら相棄てたり）とあるを引く。厳君平が世俗を顧みず、世間もまた厳君平に見向きもしないと言う。

杜甫にもいくつか用例があり、「送顧八分文学適洪吉州」（『詳注』巻二二）に、「視我揚馬間、白首不相棄」（我を視る　揚馬の間、白首も相棄てず）とあるのは、年を取っても交友関係を破棄しないことを言う。

同様の「棄」は、張籍にこの他三例、うち25「呉宮怨」（巻一）に、「白日在天光在地、君今那得長相棄」（白日　天に在りて　光　地に在り、君　今那ぞ長えに相棄つるを得んや）とあり、また、29「白頭吟」（巻一）に、「春天百草秋始衰、棄我不待白頭時」（春天の百草　秋　始めて衰え、我を棄てて白頭の時を待たず）とあるのは、いずれも見捨てられた宮女の嘆きを詠ずる内容である。王建「贈離曲」（『王建詩集』巻二）に、「少年使我忽相棄、雌鳴雄号夜悠悠」（少年にして　我をして忽ち相棄てしめ、雌鳴き雄号し　夜悠悠たり）とあるのも、棄婦の嘆きを詠じている。

この二句では、せっかく知り合って交遊を結んだにも関わらず、お互いに旅人であるため別れざるを得ないとその無念さを詠い、詩全体の結びとする。

以上の9～12の四句が一韻でひとまとまりになっている。ここでは一人称の「我」を使って旅人が前面に出てきており、それによってもう一方の旅人である「子」との別れの辛さをストレートに吐露している。

【補】

この詩は換韻の箇所によって三つの段落に分けることができる。

1～4句　別れの場面

5～8句　別後の様子

9～12句　再び別れの場面

第一段と第二段は、二人の旅人の別れの場面と別れた後の様子が描かれており、時間的につながりがある。第三段は、場面が再び第一段と同じ別れの場面に戻っている。またどのような視点から詠われているのか見てみると、第一段は、二人の旅人の様子を客観的に描写しているのに対し、第二段では旅人の視点で詠われている。そして第三段では、旅人の一人が前面に出てきて、相手との別れの思いをストレートに述べるという構造になっており、視点が徐々に旅人に近づいていくという構成上の工夫がうかがえる。

さて、この詩の表現の特徴について見てみれば、いずれの段落も、張籍以前の離別をテーマにした詩で使われる表現や詩語を用いて旅人同士の別れを詠じている。そして特に最後の9～12句について言えば、ここは「男女間の愛と別れ」をイメージさせる表現を多く用いていることが指摘できるだろう。

まず、9句の「雲」と「雨」の言葉からは、【語釈】には挙げていないが、宋玉の「高唐賦」に記される楚王と神女の逢瀬が容易に思い浮かぶ。そして、10句「会合」の語からは、用例として挙げた曹植「七哀詩」の男女（夫婦）の会合が想起されるであろう。そして詩の結びの11・12句には、「一身」「棄」といった男女間の深い愛情や離別と関わる詩語を用いて、旅人同士の別れ難い思いを表現している。

張籍が女性の心情を巧みに表現する詩人であることは、これまで3「雑怨」、7「征婦怨」、8「白紵歌」、10「寄衣曲」（ともに巻一）によって確認してきたが、本稿後掲の20「節婦吟」（同）にも同様の特徴が指摘できる。「各東西」は男女ではなく、旅人同士（男同士）の別れを詠じた詩であるが、そうした詩においても、男女間の愛情や女性の思いを詠ずる際に使う表現を、張籍が効果的に用いようとしたと言えるのではなかろうか。（畑村）

20節婦吟

【題解】

貞節な妻のうた。『楽府詩集』巻九五に「新楽府辞」として収録されている。他の詩人の作は収められていない。

「節婦」は貞節な妻。用例のあまり見られないことばで、張籍以前の詩においては、傅玄の「秋胡行二首」其一（『楽府詩集』巻三六）に「美此節婦、

高行巍峨」（美なるかな　此の節婦、高行　巍峨たり）という例が見えるのみのようだ。ここで「節婦」と呼ばれているのは、魯の秋胡の妻。秋胡は結婚してすぐに家を去り、数年たって帰宅した。途中で美しい桑摘みの女性を見かけ、誘惑したが拒絶され、しかたなく帰宅したところ妻がその女性であった。妻は夫の行いを恥じて、川に身を投げて死んだという。

張籍の「節婦」の用例はこれのみで、『全唐詩』でも後に二例のみ。李頻の「寄遠」（『全唐詩』五八七）と胡曾の「望夫山」（『全唐詩』六四七）で、ともに望夫石の故事を用いながら、夫の帰りを待って石になった妻やその系統に連なる女性を「節婦」と呼んでいるようである。

唐代の貞節観については、多くの著書や論文があるので、詳細はそれらに譲ることとするが、「節婦」ということばによって表現された女性について、簡単に記しておくこととしたい。

歴史書においては、『宋書』武帝紀から、孝子や節婦に褒美を与えたという記述が時折り見えるようになる。具体的に「節婦」として表彰された人物としては、隋以前には二人の人物がいるようだ。『魏書』列女伝に見える刁思遵の妻の魯氏と『隋書』・『北史』の列女伝に見える韓覬の妻の于氏で、いずれも幼くして嫁ぎ、夫をすぐに亡くして子供もいなかったが、再婚の勧めに応じなかった女性である。

魯氏の場合は、再婚しない娘に業を煮やした父母が、姑である刁氏が再婚させないのだと訴え出たところ、老いた姑とともに役所に出向いて実情を述べたといい、廃帝によって「節婦」と称されている。于氏の方は、父からの再婚話を断って、庶子を世継ぎとして我が子のように育て、たまに親族の家に行く時以外は人前に姿を見せず、粗衣粗食で音楽なども遠ざけた。文帝によって称賛されて門に表柱が建てられ、長安中が「節婦闕」と称したという。

新旧『唐書』の列女伝等で「節婦」と称されている女性は、三人いるようだ。一人は大暦中の江陰県尉である鄒待徴の妻の薄氏で、賊に捕らえられて辱められようとしたところ、村人を通じて夫に「義として辱めを受けず」とのことばを伝えた後、江に身を投じたという。江左の多くの文人が彼女のために「節婦文」を作ったとされており、実際に李華の「哀節婦賦」（『全唐文』巻三一四）が伝えられている。

もう一人は鄭廉の妻の「堅貞節婦」李氏で、十七歳で嫁いで一年もしないうちに夫が亡くなり、粗衣粗食の生活を続けていたが、夢の中に男が出てきて求婚した。その後もたびたび夢に見るので、自分の容貌がまだ衰えていないために招いたものと思い、髪を切りぼろを着て、顔も体も垢と埃にまみれるようにしたところ、男の夢を見なくなったという。刺史の白大威がその操をほめ、「堅貞節婦」と名付けて表柱を建て、住んでいる所を「節婦里」と呼んだという。

最後の一人は、安南の賊帥である陶斉亮の母の「金節婦」なる女性で、やや傾向が異なっている。我が子斉亮に忠義を教えようとしたが、頑として受けつけなかったため子と交わりを断ち、謹厳実直な生涯を貫いた人物で、大暦の初めに称揚されている。この人物の場合、「節婦」であると称賛されたという記述はないので、あるいは彼女の名前か呼び名であったかもしれない。

「吟」はしばしば楽府題に用いられる字。『楽府詩集』で漢横吹曲に分類される「隴頭吟」、吟歎曲に分類される「大雅吟」、楚調曲に分類される「梁甫吟」・「白頭吟」・「東武吟」など、古くから多くの楽府題に用いられている。

張籍にもいくつか用例があるが、例えば29「白頭吟」（巻一）は古題を用いたものであり、422「樵客吟」（巻七）はこの詩と同じく、張籍によって新たに創設された楽府題のようである。

なお、「節婦吟」と似た作り方の楽府題としては、「処女吟」（『楽府詩集』巻五八）・「孀婦吟」（同巻七六）がある。

『楽府詩集』の解題によれば「処女吟」は「琴操」に見える古いもので、魯の処女が「女貞木」（ねずみもちの木）を見て、節を守ろうという自己の思いを詠じた作とされている。『楽府詩集』ではその後に梁の簡文帝と沈約の「貞女引」、孟郊の「列女操」が並んでおり、いずれも貞節を守り通したいという女性の思いが詠じられているようだ。「孀婦吟」は北周の蕭撝の作を収めるのみ。夫のいない寡婦の寂しさを詠じたものである。

テキストおよび四庫全書本・『楽府詩集』は「節婦吟」とのみ題しているが、この詩題にはさまざまな異同がある。

『中晩唐詩叩弾集』は「節婦吟」と題し、題下の注に「此寄東平李師空作也」という。『唐文粋』・『唐詩紀事』は「節婦吟寄東平李司空」に作り、『唐詩百名家全集』・静嘉堂本・『全唐詩』は、「節婦吟寄東平李司空師道」に作っている。

「東平」は地名、隋の東平郡（山東省東平県一帯）で、唐代の鄆州。「司空」は官名。李師道は元和十年（815）、時の宰相武元衡の暗殺を指示したことで知られる、山東の軍閥。元和元年（806）から元和十三年（818）まで平盧淄青節度使の任にあり、元和十一年（816）、検校司空を加えられている。後に引く『容斎三筆』の記述と「寄東平李司空師道」に作る詩題とが関連づけられて、この詩は、この李師道から幕下に招かれた張籍が、拒絶の意を伝えるために制作されたとされている。

このことはこの詩の制作年代と関わることになり、上に記した師道の経歴からして、「東平司空李師道」と呼べるのは元和十一年（816）から元和十三年（818）までの時期ということになるが、この時、張籍は国士監助教として

長安にいた。

王瑾氏は「張籍作《節婦吟》置疑」（『文献研究』第一輯所収、北京図書館出版社、一九九九年）の中で、「節婦吟」の表現から、この詩の作者は郎官にあった人物と考えるべきであり、張籍ではないという説を提出する。そして、李師道の節度使時期に、朝廷から東平に派遣された使者の張宿という人物が、この詩の作者であろうと考証している。

一方で、『唐詩百名家全集』本等が李師道とするのは誤りで、この李司空は李師道ではないとする説もある。その根拠となるのが宋の洪邁の『容斎三筆』巻六「張籍陳無己詩」（四部叢刊）の条で、次のようにいう。

張籍在他幕、鄆帥李師古、又以書幣辟之。籍却而不納、而作節婦吟一章、寄之曰、……（詩は省略）

張籍　他幕に在り、鄆帥李師古、又た書幣を以て之を辟す。籍　却けて納れず、而して節婦吟一章を作り、之に寄せて曰く、……

これによれば、他の節度使の幕下にいた張籍を招いたのは、李師古ということになる（正確にいえば、李師道という名前は一部の版本の詩題にのみ現れるもので、張籍を招いたということが資料に記されているのは、この李師古のみである）。

李師古は李師道の異母兄で、貞元八年（792）に鄆州大都府長史となり、貞元二十一年（805）三月に検校司空となり、元和元年（806）の閏六月に卒している。李師道はその死後に後任として平盧淄青節度使となったのである。

すなわち李師古を「東平李司空」と呼びうるのは、貞元二十一年（805）から元和元年（806）の間ということになる。

羅氏年譜によれば、張籍はこの時ちょうど節度使の幕僚であったとされており、羅氏は、以上のことに基いて、李師道に作るテキストは誤りで、李師古が正しいとし、この詩を貞元二十一年（805）の作としている。

以上のような諸説があって、張籍の作かどうかも分からない作品であるが、新たな資料が見出されない限りは、『容斎三筆』の記述に従い、李師道とするテキストが誤りであると考えるのが、最も矛盾がないように思われる。

なお、この詩は辛延年の「羽林郎」（『玉臺新詠』巻一。以下、出典は省略する）に基づいていることが宋の劉克荘の『後村詩話』によって指摘されており、また清の賀貽孫の『詩筏』には、古楽府「陌上桑」（同前。ただし『玉臺新詠』は「日出東南隅行」に作るが、諸注釈書に従って「陌上桑」と表記する。以下、出典は省略）に基づくと指摘されている。久保天随『古詩評釈』（新声社、一九〇〇年）や徐注においてこの二首との関連について述べられており、さらに丸山茂氏「張籍楽府『節婦吟』について」（『研究紀要』第二九号、日本大学人文科学研究所、一九八四年）においては、その関係が詳細に述べられるとともに懇切な読解が施されている。先に触れた李師古・李師道の事跡についても詳述されている。

また、有名な作品であるため、詩話において多数の言及がされているほか、日中のさまざまな注釈書に収録されており、特に野口一雄氏の『女性と恋愛』（『中国古典詩聚花』10、小学館、一九八四年）には啓発されることが多かった。さらに、専論にも丸山氏の前掲論文の他、呉秀笑氏の「試析『節婦吟』—兼論叙事詩的情節構成」（『中外文学』七巻第二期、一九七八年）や董昌運氏の「以纏綿情意味、表節義肝腸—読張籍『節婦吟』」（『文史知識』、一九九四年第五期）などがある。本稿の作成に当たっては、これら多くの先行文献に多大な恩恵を蒙っているが、煩雑になるので、必要な部分以外は一々記すことはしなかった。

【本文・書き下し文】

1君知妾有夫　君は　妾に夫有るを知りて
2贈妾雙明珠　妾に贈る　双明珠
3感君纏綿意　君が纏綿の意に感じ
4繫在紅羅襦　繫ぎて紅羅の襦に在り
5妾家高樓連苑起　妾が家の高楼は　苑に連なって起ち
6良人執戟明光裏　良人　戟を執る　明光の裏
7知君用心如日月　君の心を用うること　日月の如きを知るも
8事夫誓擬同生死　夫に事えて誓擬す　生死を同じくするを
9還君明珠雙淚垂　君に明珠を還せば　双涙垂る
10何不相逢未嫁時　何ぞ　未だ嫁せざりし時に相逢わざる

【口語訳】

1あなたは　私に夫がいるのを知りながら
2私に二つの輝く真珠をくれました
3あなたの熱い思いに打たれ
4赤いうすぎぬのブラウスに縫いつけました
5私の家の高殿は　御苑に連なって建っており
6夫は明光殿で手に戟を持つ身
7あなたのお心遣いが　日月のようにくもりないものと知ってはいますが
8夫に仕え　一生を添いとげようと誓った私
9あなたに真珠を返そうとすると　両の目から涙がこぼれます

10どうして嫁ぐ前にめぐり逢わなかったのでしょう

【押韻】
夫・珠・襦―上平一〇虞
起・裏―上声六止　死―上声五旨（同用）
垂―上平五支　時―上平七之（同用）

【語釈】
1・2　君知妾有夫、贈妾双明珠
〔君知妾有夫〕あなたは私に夫がいるのを知っていながら。
陳注も引くように、「陌上桑」に「使君自有婦、羅敷自有夫」（使君　自ら婦有り、羅敷　自ら夫有り）の句がある。
唐詩においては、王維の「雑詩」（趙本巻五）に「楚国無如妾、秦家自有夫」（楚国　妾に如くは無し、秦家　自ずから夫有り）と「陌上桑」が踏まえられている。
呉氏・丸山氏が指摘するように、冒頭のわずか五字で、君・夫・妾の三者の関係が鮮やかに示される。

〔贈妾双明珠〕私に二つの真珠をくれた。
「明珠」は真珠。「明」は真珠の属性を冠したのみで、特に強い意味はないと考えられるが、後に触れるように、この詩には光を表す文字が多用されていることが指摘されているので、訳文にはその意味を出しておいた。
「陌上桑」に「頭上倭堕髻、耳中明月珠」（頭上　倭堕の髻、耳中　明月の珠）とあり、「古詩為焦仲卿妻作」（『玉臺新詠』巻一）に「腰若流紈素、耳著明月璫」（腰は流紈の素の若く、耳には明月の璫を著く）とある。また、繁欽の「定情詩」（同前）には「何以致区区、耳中双明珠」（何を以てか　区区を致さん、耳中の双明珠）と「双明珠」の形で用いられている。丸山氏はこれらの例を挙げた上で、この真珠は耳飾りであろうと指摘しておられる。
また、丸山氏はこの「双明珠」が「還君明珠双涙流」の句の伏線となっていて、他の詩語と置き換えられないことを述べられ、さらにこの詩は「明珠」「戟」「明光」「日月」「涙」という「光」を放つ詩語をちりばめることによって、それぞれの「心」を象徴させていると指摘される。
「明珠」の用例としては、繁欽の「定情詩」の他に、曹植の「美女篇」（『文選』巻二七）に「明珠交玉体、珊瑚間木難」（明珠　玉体に交じり、珊瑚　木難に間わる）というなどの用例がある。美女のアクセサリーを描写した句である。
張籍の敬愛した杜甫には一例のみ。「諸将五首」其四（『詳注』巻一六）に「越裳翡翠無消息、南海明珠久寂寥」（越裳の翡翠　消息無く、南海の明珠久しく寂寥）という。各地からの貢ぎ物が献上されなくなったことをいう二句。
張籍の「明珠」の用例はこれのみ。似た詩語としては、丸山氏も指摘するように、5「寄遠曲」（巻一）に「蘭舟桂楫常渡江、無因重寄双瓊璫」（蘭舟桂楫　常に江を渡るも、重ねて双瓊璫を寄するに因る無し）と「双瓊璫」の語があった。その【語釈】参照。
冒頭の二句、夫ある女性が真珠を贈られたことが詠じられている。五言二句のわずか十字の中に「妾」の文字が二回用いられており、「私に夫がいるのを知りながら、その私に贈り物をくれた」と、意外な気持ち・相手の思いに対する感謝の気持ちが強調されているようである。

3・4　感君纏綿意、繫在紅羅襦
〔感君纏綿意〕あなたのねんごろな気持ちに感動して。
「纏綿」は畳韻語、ともに『広韻』で下平二仙に属する文字。まとわりついて離れない形容。「纏綿意」で、心にまつわって離れない気持ち。一途な思い。
「古詩為焦仲卿妻作」（前出）に「新婦謂府吏、感君区区懐」（新婦　府吏に謂う、君が区区の懐いに感ず）という。実家に返される妻が、しばらくしたら迎えに来るという夫に対して述べた部分。「区区」は繁欽の「定情詩」にも用いられていたが、こまやかな心遣いを形容することばで、「纏綿」に近い意味といえよう。
「纏綿」の語は、『淮南子』に刀剣の模様を描写して「纏綿経宂、似数而疏」（纏綿　経宂して、数に似て疏なり）というなど古くから見え、詩においても多くの用例がある。
男女の情について用いた例としては、六朝期には「子夜四時歌」の「夏歌二十首」其二十（『楽府詩集』巻四四）に「盛暑非遊節、百慮相纏綿」（盛暑は遊ぶ節に非ず、百慮　相纏綿す）といい、王粛の妻謝氏の「贈王粛」（『洛陽伽藍記』巻三）に「得路逐勝去、頗憶纏綿時」（路を得て　勝を逐いて去り、頗る憶う　纏綿の時）というなどの例がある。
唐詩においても多くの用例があり、陳注は李白の「相逢行」（王琦注本巻六）に「錦衾与羅幃、纏綿会有時」（錦衾と羅幃と、纏綿　会ず時有り）という例を引いている。ただ、杜甫には用例がなく、張籍の例はこれのみ。
なお、張籍と親交のあった王建の「代故人新姫侍疾」（『王建詩集』巻四）

には、「奉君纏綿意、幸願莫相忘」（君に奉ず　纏綿の意、幸願わくは　相忘るる莫れ）と、「纏綿意」の形で用いられている。

〔繫在紅羅襦〕赤いうすぎぬの襦に縫いつける。

「繫」はつなぐ、着物につなぐのであるから、縫いつける・くくりつけるという訳語が当たるだろう。「在」は「於」などに同じく場所を表すことばで、「紅羅の襦に繫ぐ」と訓読することもできよう。

「羅」はうすぎぬ。「襦」は上半身に着る着物で、たけの短いもの。李建崑注は『説文解字』衣部に「襦、短衣也」（襦は、短衣なり）というのを引いている。

「紅羅」の語は「羽林郎」に「貽我青銅鏡、結我紅羅裾」（我に青銅の鏡を貽り、我が紅羅の裾に結ぶ）という例がある。この二句が「青銅の鏡を私の紅羅の着物の前襟に結ぼうとする」の意であることについては、丸山氏に考証がある。また「古詩為焦仲卿妻作」（前出）に「紅羅複斗帳、四角垂香囊」（紅羅　複斗帳、四角　香囊を垂る）の句がある。こちらはベッドのカーテン。

唐詩においては、李白の「白胡桃」（王琦注本巻二四）に「紅羅袖裏分明見、白玉盤中看却無」（紅羅の袖裏　分明に見え、白玉の盤中　看れば却って無し）というなどの例があるが、あまり例は多くないようだ。杜甫には用例がなく、張籍にはこれのみ。

一方「羅襦」は、ことばとしては古く『周禮』夏官「羅氏」に「蜡則作羅襦」（蜡には則ち羅襦を作す）と見えるが、これは目の細かい網の意。

陳注は『史記』滑稽列伝の淳于髡伝に「主人留髡而送客、羅襦襟解、微聞薌沢」（主人　髡を留めて客を送り、羅襦の襟解け、微かに薌沢を聞く）という部分を引いている。

詩においては、王僧孺の「寵姫詩」（『藝文類聚』巻三二）に「玉釵時可挂、羅襦詎難解」（玉釵　時に挂くべし、羅襦　詎ぞ解き難からん）といい、盧照隣の「長安古意」（『全唐詩』巻四一）に「羅襦宝帯為君解、燕歌趙舞為君開」（羅襦宝帯　君が為に解き、燕歌趙舞　君が為に開く）というなどの例がある。いずれも淳于髡伝に基づく表現。

杜甫には「新婚別」（『詳注』巻七）の中に二例あり、「自嗟貧家女、久致羅襦裳。羅襦不復施、対君洗紅粧」（自ら嗟く　貧家の女、久しくして羅襦の裳を致すを。羅襦　復た施さず、君に対して　紅粧を洗わん）と用いられている。

張籍にももう二例ある。一例は寵愛の衰えた宮女の嘆きを詠ずる29「白頭吟」（前出）に「羅襦玉珥色未暗、今朝已道不相宜」（羅襦玉珥　色未だ暗からざるに、今朝已に道う　相宜しからずと）と見える。もう一例は江南の女性の風俗を描いた367「呉楚歌詞」（巻六）に「庭前春鳥啄林声、紅夾羅襦縫未成」（庭前の春鳥　林を啄む声、紅夾の羅襦　縫いて未だ成らず）の句がある。

なお、「紅羅襦」の「紅」字については、呉秀笑氏が妻の年齢や性格・結婚後間もないこと表すと指摘しておられ、また丸山氏は、「光」を放つ詩語が多用されるこの詩の中で、「紅」が唯一の色彩語であり、このことが却って純化された鮮烈な印象を与えるのに役立つと指摘されている。

続く二句、前の二句を承けて、相手の一途な気持ちに打たれて真珠を受け取り、ブラウスに縫いつけたことが述べられる。耳飾りであれば耳に飾るのが普通であろうし、真珠の玉であってももっと目立つ飾り方がありそうだが、着物に縫いつけたというのは、夫に見られないようにするためと、しっかりと離さず持っておきたいという思いの表れであろうか。

以上の五言四句が一韻で、ひとまとまりとなっている。プレゼントを贈られた時のことを描写したもので、別離の時点からいえば過去の描写ということになる。

5・6　妾家高楼連苑起、良人執戟明光裏

〔妾家高楼〕

「高楼」は16「沙堤行呈裴相公」（巻一）に見えた。その【語釈】を参照。

張籍に他の例のうち、先に「羅襦」の語釈にも引いた29「白頭吟」（前出）に「宮中為我起高楼、更開花池種芳樹」（宮中　我が為に　高楼を起こし、更に花池を開きて　芳樹を種う）の句があり、寵愛を受けていた当時、宮中によって高楼が建てられ、園池が整えられたことを表現している。この「節婦吟」では夫の方が天子に重用されていることを表すものであるが、よく似た用い方といえよう。

〔連苑起〕御苑に連なって建てられている。

「苑」については、中国の注釈書では何の苑か特に限定していないようだが、日本の諸注釈書が指摘するように、御苑を指すであろう。

この意味での「連苑」の用例としては、盛唐の韋述の『西京新記』（『太平御覧』一八三）に洛陽城を説明して「東京、俗曰洛陽城、城高一丈八尺、……西面連苑」（東京は、俗に洛陽城と曰ひ、城の高さ一丈八尺、……西面は苑に連なる）という記述が挙げられるようだ。詩における「連苑」の用例は未見。

〔良人〕おっと。

『毛詩』に数例が見える、古くからある詩語である。そのうち、陳注は唐風「綢繆」に「今夕何夕、見此良人」（今夕　何の夕ぞ、此の良人を見る）という句を引いている。

また、「古詩十九首」其十六（『文選』巻二九）にも「良人惟古懽、枉駕恵前綏」（良人　古の懽しみを惟い、駕を枉げて　前綏を恵む）の句がある。

唐詩においては、李白の「子夜呉歌四首」其三（王琦注本巻六）に「何日平胡虜、良人罷遠征」（何れの日か　胡虜を平らげ、良人　遠征を罷めん）という句が名高い。杜甫には「乾元中寓居同谷県作歌七首」其四（『詳注』巻八）に「有妹有妹在鍾離、良人早歿諸孤癡」（妹有り　妹有り　鍾離に在り、良人は早に歿し　諸孤は癡なり）という一例のみ。妹の夫をいう例。

王建の「採桑」（『王建詩集』巻四）では桑摘みの女性を詠じた後、「所念豈回顧、良人在高楼」（念う所なるも　豈に回顧せん、良人　高楼に在り）と「高楼」に「良人」がいるために誘いをかけるのを諦めるという気持ちが詠じられているようで、この詩と同じく「高楼」によって夫の立派さを表現している。

張籍の「良人」の用例はこれのみ。

〔執戟〕「戟」は「卜」字形の刃を持つほこ。「戟を執る」とは、皇帝の左右を守る近衛兵であることを指し、また秦漢の頃、戟を持って宮殿の入り口を守った侍郎の官位をも指す。

諸注に引く『史記』の淮陰侯列伝に「韓信謝曰、臣事項王、官不過郎中、位不過執戟」（韓信　謝して曰く、臣　項王に事えて、官は郎中に過ぎず、位は執戟に過ぎず）という記述がある。また、揚雄が郎官に就いていたことから、六朝から唐にかけて「執戟」の語からは揚雄が連想されたようである。

詩における例のうち、六朝では謝霊運の「斎中読書」（『文選』巻三〇）に「既笑沮溺苦、又哂子雲閣。執戟亦以疲、耕稼豈云楽」（既に笑う　沮溺の苦しみを、又た哂う　子雲の閣を。執戟　亦た以に疲れ、耕稼　豈に云に楽しからんや）というなどの例があり、唐においては、駱賓王の「疇昔篇」（『全唐詩』巻七七）に「賦文慚昔馬、執戟歎前揚」（賦文　昔の馬に慚じ、執戟　前の揚を歎く）といい、王維の「登楼歌」（趙本巻一）に「執戟疲於下位、老夫好隠兮牆東」（執戟　下位に疲れ、老夫　好んで牆東に隠る）というなどの例がある。いずれも揚雄の故事を用いており、すでに『史記』の韓信が嫌っていたように、「執戟」は低い官位の象徴として用いられているようだ。

ただ、陳の張正見の「艶歌行」（『楽府詩集』巻二八）に「二八秦楼婦、三十侍中郎。執戟超丹地、豊貂入建章」（二八　秦楼の婦、三十　侍中の郎。執戟　丹地を超え、豊貂　建章に入る）という例は、「陌上桑」を踏まえて、夫の立派さを自慢をする中に「執戟」ということばを用いており、この詩と共通している。

「執戟」は、杜甫には例がないようで、張籍には他に一例、22「永嘉行」（巻一）に「黄頭鮮卑入洛陽、胡児執戟升明堂」（黄頭の鮮卑　洛陽に入り、胡児　戟を執り　明堂に升る）という。これは異民族が武器を持って宮中に入ったことを詠じたものである。

〔明光裏〕「明光」は漢代の宮殿の名。

宋の程大昌の『雍録』に「漢有明光宮三、一在北宮、与長楽宮相連、一在甘泉宮、一為尚書奏事之所」（漢に明光宮三有り、一は北宮に在り、長楽宮と相連なり、一は甘泉宮に在り、一は尚書奏事の所為り）というように、同名の宮殿が複数あったようだ。宮殿名との関連で有名なのは、『三輔黄図』巻二「漢宮」に引く『三秦記』に「未央宮漸臺西有桂宮。中有明光殿、皆金玉珠璣為簾箔、処処明月珠。金扉玉階、昼夜光明」（未央宮の漸臺の西に桂宮有り。中に明光殿有り、皆な金玉珠璣を簾箔と為し、処処に明月の珠あり。金扉玉階、昼夜に光明あり）というものであろう。諸注も多くこの文章を引く。

六朝詩においては、陳の後主の「長安道」（『楽府詩集』巻二三）に「建章通未央、長楽属明光」（建章　未央に通じ、長楽　明光に属なる）と宮殿名を列挙する中に見え、また北周の王褒の「凌雲臺」（『楽府詩集』巻七五）に、台上からの眺望を詠じて「北臨酸棗寺、西眺明光宮」（北に臨む　酸棗寺、西に眺む　明光宮）の句がある。

以上の六朝の例にはあまり固定したイメージがないようだが、唐詩においては、宗楚客の「正月晦日侍宴滻水応制賦得長字」（『全唐詩』巻四六）に「御輦出明光、乗流泛羽觴」（御輦　明光を出で、流れに乗じて　羽觴を泛ぶ）といい、丁仙芝の「戯贈姚侍御」（『全唐詩』一一四）に「頭戴獬豸急晨趨、明光殿前見天子」（頭に獬豸を戴いて　急ぎ晨に趨き、明光殿前　天子に見ゆ）といい、王維の「燕支行」（趙本巻六）に「漢家天将才且雄、來時謁帝明光宮」（漢家の天将　才且つ雄、來りし時　帝に謁す　明光宮）というなど、天子のいる場所・天子に謁見する場所として用いられている。

杜甫に四例あり、そのうち「壮遊」（『詳注』巻一六）に「曳裾置醴地、奏賦入明光」（裾を曳く　醴を置くの地、賦を奏して　明光に入る）という例などは、やはり同じイメージで用いられているようだ。

張籍にはこれのみ。

七言部分最初の二句。前の四句から転じて、夫の地位の高さをいう。前の句は家による表現で、その家に高楼があり、しかも禁苑の近くにあることを詠じ、後の句は官職による表現で、皇帝に近侍する近衛兵であることを詠ずる。この夫の地位が、別れなければならない理由の第一となっている。

7・8　知君用心如日月、事夫誓擬同生死

〔用心〕心を用いること、心配り。この詩においては、相手の細やかな愛情をいう。

陳注は『論語』陽貨に「飽食終日、無所用心、難矣哉」（飽食すること終日、心を用うる所無きは、難いかな）という例を引いている。

詩においてはあまり用例が見られず、六朝では傅玄の「晋鼙舞歌五首」其五「明君篇」（『宋書』楽志）其一に「邪臣多端変、用心何委曲」（邪臣　多端に変ず、心を用うること　何ぞ委曲なる）というなど数例が見られるのみ。唐詩においても用例は多くないが、杜甫には四例ある。一例を挙げれば、「秋行官張望督促東渚耗稲向畢清晨遣女奴阿稽竪子阿段往問」（『詳注』巻一九）に「尚恐主守疏、用心未甚臧」（尚お恐る　主守の疏にして、心を用うること　未だ甚しくは臧からざるを）という句がある。

なお、ここでの意味とはややずれるが、杜甫の四例のうち、「貽阮隱居」（『詳注』巻七）と「解悶十二首」其七（『詳注』巻一七）の二例の「用心」が、詩を作る時に考えをめぐらす意味で用いられているのは興味深い。

張籍の用例はこれのみ。

〔如日月〕太陽や月のようだ。

「日月」によって比喩される内容については、説が分かれているようだ。

丸山氏は「昼には太陽が、そして夜には月が永遠に照らし続ける如く、いつも、そしていつまでも変わらぬこと」とされる。そして、まず『周易』恒の卦の彖伝に「日月得天而能久照、四時変化而能久成、聖人久於其道而天下化成」（日月は天を得て能く久しく照らし、四時は変化して能く久しく成り、聖人は其の道に久しくして天下化成す）という部分を挙げる。

丸山氏はさらに宋の孝武帝の「擬徐幹詩」（『玉臺新詠』巻一〇、丸山氏が「丁督護歌」二首其二とされるのは誤りか）に「思君如日月、廻還昼夜生」（君を思うこと　日月の如し、廻環して　昼夜に生ず）という例をも挙げておられる。後の句に説明されているように、相手への思いが太陽や月のようにいつまでも循環する比喩として用いられているようだ。

これに対し、ほとんどの注釈書では、日月の光のように明らかでくもりのないことの比喩とされている。

この方向で用いられた例としては、『尚書』泰誓下に文王の徳を称えて「惟我文考、若日月之照臨、光于四方、顕于西土」（惟れ我が文考、日月の照臨するが若く、四方に光り、西土に顕る）といい、『荀子』不苟に「盗跖吟口、名声若日月、与舜禹俱伝而不息」（盗跖は吟口せられ、名声は日月の若く、舜禹と倶に伝はりて息まず）といい、『晋書』温嶠伝に「賞募之信、明如日月、有能斬約峻者、封五等侯、賞布万匹」（賞募の信は、明らかなること日月の如く、能有りて約峻を斬る者は、五等侯に封じ、布万匹を賞せん）という例などが挙げられよう。

詩において「日月」は移りゆく時間の象徴として詠じられることが多いようだが、明らかなるものとして用いられた例も見られる。傅玄の「董逃行歴九秋篇」（『玉臺新詠』巻九）に「顧多君心所親、乃命妙妓才人、炳若日月星辰」（顧みるに君が心に親しむ所多からん、乃ち妙妓才人に命じ、炳たること　日月星辰の若し）という例は星辰とともに用いられ、妓女や宮女の輝くばかりの美しさを詠ずる。

唐詩においては、李白の「上皇西巡南京歌十首」其十（王琦注本巻八）に「少帝長安開紫極、双懸日月照乾坤」（少帝　長安に紫極を開き、日月を双べ懸けて　乾坤を照らす）といい、高適の「酬裴員外以詩代書」（『全唐詩』巻二一一）に「頼得日月明、照耀無不該」（日月の明らかなるに頼り得て、照耀して　該ねざる無し）というなどの例がある。

杜甫には二〇例の用例があるようで、ほとんどが月日の推移をいうようだが、「九日寄岑参」（『詳注』巻三）に「大明韜日月、曠野号禽獣」（大明　日月を韜み、曠野に　禽獣号ぶ）という例などは、覆い隠されたという表現ではあるけれども、輝くものとして「日月」を用いていよう。

張籍の例は他に二例、そのうち、440「洛陽行」（巻七）に「百官日月拝章表、駅使相続長安道」（百官日月　章表を拝し、駅使相続く　長安の道）というのは、毎日毎月いつもの意で用いられているようで、丸山氏の解釈を補強する例となしえよう。もう一例は時の流れの例。

どちらの解釈も成り立ちうるであろうし、あるいは両方の意味が込められているのかもしれないが、ここでは通説に従って、明らかでくもりないことの比喩と解釈しておいた。宋の光武帝の例は後の句で「如日月」の比喩の内容が説明されているし、張籍の「洛陽行」の例も文脈からいつもの意であることは明らかであるのに対し、この詩では「如日月」というのみである。この表現からまず思い浮かべるのは、不変性・永続性よりも、明るいということではないかと思われる。

詩に歌われる妻の立場からしても、相手の愛情が不変であることはさほど

重要でないのではあるまいか。それよりも、夫があることを知りながら真珠を贈ってくれたという、何の打算もためらいもない純粋な相手の気持ち、それこそが彼女にとって何より大切なものであるように思われる。

〔事夫〕夫につかえる。

『戦国策』楚策四に「婦人所以事夫者、色也」（婦人の夫に事える所以の者は、色なり）ということばがある。また曹大家（班昭）の『女誡』夫婦（『後漢書』本伝）に「夫不賢、則無以御婦、婦不賢、則無以事夫。夫不御婦、則威儀廃缺、婦不事夫、則義理墮闕」（夫　賢ならざれば、則ち以て婦を御する無く、婦　賢ならざれば、則ち以て夫に事うる無し。夫　婦を御せざれば、則ち威儀廃缺し、婦　夫に事えざれば、則ち義理墮闕す）という。

六朝詩においては、「古詩為焦仲卿妻作」（前出）に「謝家事夫壻、中道還兄門」（家を謝して　夫壻に事え、中道にして　兄の門に還る）と、「事夫壻」の形で用いられている例を見るのみ。

唐詩には張籍以前に例がなく、後にも鮑溶の「秋思三首」其二（『全唐詩』四八六）に「女児晩事夫、顔色同秋蛍」（女児　晩に夫に事え、顔色　秋蛍に同じ）という一例が見えるのみ。

〔誓擬〕「誓」はちかう、「擬」は～しようと思うの意。

この「誓」字について、我が国の注釈書の中には、「まさに」と訓読し、「将」と同じ意味の助字で「ちかう」意味の動詞ではないとするものがあるが、その根拠はよく分からない。後に挙げる杜甫の「新婚別」の例などから導かれたものであろうか。こちらで解すれば「誓擬」の二字で「～しようと思う」という意味になろう。誓うという動詞で解するよりやや軽い意味になり、また、現在の気持ちを述べていることになろう。

「誓擬」という語の用例としては、宋之問の「早発大庾嶺」（『全唐詩』巻五一）に「生還倘非遠、誓擬酬恩徳」（生還　倘し遠きに非ざれば、誓擬す　恩徳に酬いるを）という例が見出せたのみであった。この例も、どちらの意味でも解釈できそうだが、長安に帰ったら皇恩に報いようという強い決意を述べているようであり、誓うという動詞で解した方がふさわしいように思われる。

丸山氏は「古詩為焦仲卿妻作」（前出）の「府吏見丁寧、結誓不別離」（府吏　丁寧にせられ、誓いを結んで　別離せずと）の句を引いている。こちらは誓いの意味である。

杜甫には「誓」字の例が六例あるようだが、そのうち「新婚別」（前出）に「誓欲随君去、形勢反蒼黄」（誓って　君に随いて去らんと欲するも、形勢　反って蒼黄たらん）という。これは「将欲」と置き換えて、「ついて行きたいと思う」くらいの意味でも解しえようか。

張籍には「誓」の用例は他に一例、446「学仙」（巻七）に「金刀截身髪、結誓焚霊香」（金刀　身髪を截ち、誓いを結んで　霊香を焚く）というのは、「焦仲卿妻」の例と同じく「結」の目的語となっており、仙道入門の際に誓いを立てるという例のようである。

この詩の場合、誓うという強い意味で解した方がよいのではないだろうか。すなわち今の夫と結婚した折りの誓いのことを述べているということであり、現在の気持ちとは関わりなく、過去の誓いが心の中で足かせになっているのではあるまいか。

なお、「誓」の文字は用いられていないが、張籍が夫婦の永遠の愛の誓いを詩に描写した例として、34「妾薄命」（巻一）に「与君一日為夫婦、千年万歳亦相守」（君と一日　夫婦と為り、千年万歳　亦た相守る）と詠じている例が挙げられよう。

〔同生死〕生きるも死ぬも一緒である。

ことばの例としては、『晋書』慕容宝載記に記す兵士たちのことばに、「清河王、天資神武、權略過人、臣等与之誓同生死」（清河王は、天　神武を資し、権略　人に過ぐれば、臣ら　之と生死を同じくせんことを誓う）とある。

六朝詩には例が見えず、唐詩においては杜甫に一例が見えるのみ。「贈王二十四侍御契四十韻」（『詳注』巻一三）に「浪跡同生死、無心恥賤貧」（浪跡　生死を同じくし、心の賤貧を恥ずる無し）という句がある。これは生と死を同一視するということで、意味の異なる例である。

張籍には「生死」の用例がもう一例、466「祭退之」（巻七）に「公有曠達識、生死為一綱」（公に曠達の識有り、生死を一綱と為す）という句がある。これも生と死を同一視するというような方向の意味のようだ。

なお、「死生」の語は19「各東西」（巻一）に「我今与子非一身、安得死生不相棄」（我　今　子と一身に非ず、安んぞ　死生　相棄てざるを得んや）とみえた。その【語釈】参照。

前の二句で夫が顕職にあることを詠じたのを承け、夫との関係を詠ずる二句。あなたの思いは分かっているが、夫と一生添いとげることを誓ったことをいう。これが別れなければならない理由の第二である。

以上の四句が一韻でひとまとまりになっている。一度は贈り物を受け取っておきながら、こちらから別れを告げねばならない、二つの理由が示された部分といえよう。

9・10　還君明珠双涙垂、何不相逢未嫁時

〔還君明珠〕あなたに真珠をお返しする。

女性が贈られたプレゼントを返す例としては、鮑照の「行路難四首」其二（『玉臺新詠』巻九）に「還君玉釵璹瑁簪、不忍見之益悲思」（君に還さん　玉釵　璹瑁の簪、忍びず　之を見て　悲思を益すに）という句がある。容貌の衰えによって男が心変わりしたことにより、別れの際に贈り物を返すという例。また、王僧孺の「為姫人自傷」（同巻六）に「還君与妾珥、帰妾奉君裘」（君に還さん　妾に与えし珥を、妾に帰せ　君に奉ぜし裘を）という。こちらは容貌の衰えとは書かれていないが、心が離れてしまった恋人との別れに際し、自分に贈られたプレゼントは返すから、こちらから贈ったものも返してほしいという例である。

唐詩にも一例、喬知之の「棄妾篇」（『全唐詩』巻八一）に「還君結縷帯、帰妾織成詩」（君に還さん　結縷の帯を、妾に帰せ　織成の詩を）の句がある。これは容貌の衰えのために捨てられた女性の別れ際のセリフで、こちらからのプレゼントも返してほしいといっている。

杜甫には「還君」という表現はなく、張籍にはこれのみ。

〔双涙垂〕「双涙」は二つの目から流れる涙。諸注が指摘するように、「双明珠」を承けた表現である。

丸山氏も引く「古詩為焦仲卿妻作」（前出）に「却与小姑別、涙落連珠子」（却って小姑と別れんとし、涙落ちて　珠子を連ぬ）の句があり、涙を真珠に喩えている。また丸山氏は蕭繹の「戯作艶詩」（『玉臺新詠』巻七）の「揺茲扇似月、掩此涙如珠」（茲の扇の月に似たるを揺かし、此の涙の珠の如きを掩う）の句を引く。なお、この「戯作艶詩」は丸山氏が「節婦吟」の末尾の基づくところとされるものであり、【補】の部分で全詩を挙げることとする。

「双涙」の詩における用例としては、「西曲歌」の一つで宋の臧質の作ともいう「石城楽」五首其三（『楽府詩集』四七）に「執手双涙落、何時見歓還」（手を執れば　双涙落つ、何れの時か　歓の還るを見ん）といい、何遜の「秋閨怨」（『玉臺新詠』巻一〇）に「誰知夜独覚、枕前双涙滴」（誰か知らん　夜　独り覚めて、枕前　双涙滴るを）というなどの例がある。

唐詩においては盛唐以前にはほとんど用例がなく、王維と杜甫に一例ずつが見えるだけのようである。杜甫の例は「所思」（『詳注』巻一〇）に「故憑錦水将双涙、好過瞿塘灩澦堆」（故に錦水に憑りて双涙を将らん、過ぐ好し瞿塘　灩澦堆）というもの。王維の例もそうだが、女性の涙ではない。

大暦期からは用例が多いが、やはり女性の涙の例はあまりない。一例を挙げれば、吉中孚の妻の張氏の「拝新月」（『全唐詩』七九九）に「昔年拝月逞容輝、如今拝月双涙垂」（昔年　月を拝して　容輝を逞しくし、如今　月を拝して　双涙垂る）という句などがある。

張籍にはもう一例、「日月」の語釈でも引いた440「洛陽行」（前出）に「陌上老翁双涙垂、共説武皇巡幸時」（陌上の老翁　双涙垂れ、共に説く　武皇巡幸の時）という句がある。

〔何不相逢未嫁時〕どうして嫁ぐ前にめぐり逢わなかったのだろう。今の夫と結婚する前にお逢いしたかった。

「何不」、管見の及んだ張籍の別集の諸本および『唐詩紀事』『楽府詩集』『唐詩百名家全集』『中晩唐詩叩弾集』『全唐詩』等の総集は、すべて「何不」に作るが、明の唐汝詢の『唐詩解』や清の王晩衢の『唐詩合解箋注』など、選注本の多くが「恨不」に作っており、我が国の注釈書もほとんどが「恨不」に作る。

これについて徐注は「恨」の字の方がよいとするが、一方李建崑注は「恨」に作るものを俗本とし、誤りであるとしている。別集や総集の本文からすれば「何」に作るのがもとの形であろうが、「恨」に作る本文によって広く親しまれていることも確かである。

詩における「未嫁」の表現の例としては、六朝では劉緩の「敬酬劉長史詠名士悅傾城」に、「未嫁先名玉、来時本姓秦」（未だ嫁せざる　先ず玉と名づけ、来りし時　本姓は秦なり）という表現があり、主人公の名前を設定する。

唐詩においては、王績の「山中叙志」（『全唐詩』巻三七）に「孟光儻未嫁、梁鴻正須婦」（孟光　儻し未だ嫁せずんば、梁鴻　正に婦を須つ）といい、顧況の「棄婦詞」（『全唐詩』巻二六四）に「憶昔未嫁君、聞君甚周旋」（憶う　昔　未だ君に嫁せず、聞く　君の甚だ周旋するを）というなどの用例がある。また、高適の「秋胡行」では「妾本邯鄲未嫁時、容華倚翠人未知」（妾本邯鄲にて　未だ嫁がざりし時、容華倚翠　人未だ知らず）という例では「未嫁時」の形で用いている。

杜甫の「未嫁」の用例は一例、「牽牛織女」（『詳注』巻一五）に「嗟汝未嫁女、秉心鬱忡忡」（嗟汝　未だ嫁せざるの女、秉心　鬱として忡忡たり）という。七夕の行事を行う女性たちへの呼びかけのことばである。

張籍の用例はこれのみ。

末尾の二句。前の四句で別れを告げなければならない理由が述べられたのを承け、別れのことばが述べられる。結婚前にめぐり逢いたかったという悔

恨のことばから、「君」に対する思いがうかがわれ、深い余韻のある結びとして名高い二句である。

後代の詩話等で、この詩の別名が「還珠吟」と呼ばれているのも、この二句の印象の強さを物語っていよう。

【補】

一　「節婦吟」の構成について

この詩は字数と押韻から次の三つの部分に分けられる。

1～4句　男から真珠を贈られ、それを受け取ったこと
5～8句　夫の地位および夫と自分の関係（別れる理由）
9・10句　真珠を返す時の女性のことば

この三つの部分の関係については呉秀笑氏・丸山氏の論文に詳しい。

これまで注釈を施してきた作品との関係で注目されるのは、やはり換韻によって独立した最後の二句の存在であろう。この詩においても、非常に印象に残る最後の二句が工夫されている。

二　先行作品との関連について

この「節婦吟」の末尾の二句について、丸山氏は、梁の湘東王蕭繹の次の詩が張籍の脳裡に浮かんだ作ではなかったかとされる。

「戯作艶詩」（『玉臺新詠』巻七）

入堂値小婦　堂に入りて　小婦に値い
出門逢故夫　門を出でて　故夫に逢う
含辞未及吐　辞を含んで　未だ吐くに及ばず
絞袖且峙躇　袖を絞りて　且く峙躇す
揺茲扇似月　茲の扇の月に似たるを揺かし
掩此涙如珠　此の涙の珠の如きを掩う
今懐固無已　今懐　固より已む無し
故情今有餘　故情　今　餘り有り

再婚後にもとの妻と出会うという設定で、「古詩八首」其一（『玉臺新詠』巻一）の「上山采蘼蕪、下山逢故夫」（山に上りて　蘼蕪を采り、山を下りて　故夫に逢う）の詩の流れを汲むものと思われるが、この古詩が男性による二人の妻の比較のことばに終始しているのに対し、この詩は女性の立場からその思いが描かれている点で「節婦吟」と共通している。

張籍が意識していた先行作品としては、曹植の「洛神賦」（『文選』巻一九）の次の一節も挙げられるのではないだろうか。

動朱脣以徐言、陳交接之大綱。恨人神之道殊兮、怨盛年之莫当。抗羅袂以掩涕兮、涙流襟之浪浪。悼良会之永絶兮、哀一逝而異郷。無微情以效愛兮、献江南之明璫。雖潜処於太陰、長寄心於君王。

朱脣を動かして以て徐ろに言い、交接の大綱を陳ぶ。人神の道の殊なるを恨み、盛年の当る莫きを怨む。羅袂を抗げて以て涕を掩い、涙は襟に流れて浪浪たり。良会の永く絶ゆるを悼み、一たび逝きて郷を異にするを哀しむ。微情の以て愛を效す無ければ、江南の明璫を献ぜん。潜かに太陰に処ると雖も、長く心を君王に寄せん。

洛水の女神が別れを惜しみ、涙を流して璫（イヤリング）を贈るという場面で、「人神の道の殊なるを恨み、盛年の当る莫きを怨む」と、人と神と住む世界が異なることを恨み、若い頃に会えなかったことを悔やんでいる。

この賦は曹植が甄皇后のことを思って作ったとされているが、「怨盛年～」の部分に、李善は「盛年、謂少壮之時、不能得当君王之意。此言微感甄后之情」（盛年は、少壮の時、君王の意に当たるを得る能わざるを謂う。此れ微かに甄后の情に感ずるを言う）と注する。すでに曹丕のものとなった甄皇后の、添いとげることができなかった悲しみが「若い時に会いたかった」ということばに込められているということになろう。

この苦い悔恨の情は、「節婦吟」に非常に近いものがあるように思われる。

また、表現の類似したものとしては、『玉臺新詠』巻九に収める「歌辞二首」其二（『藝文類聚』巻四三は「古河中之水歌」とする）も挙げられよう。

河中之水向東流　河中の水　東に向かって流る
洛陽女児名莫愁　洛陽の女児　名は莫愁
莫愁十三能織綺　莫愁　十三　能く綺を織り
十四採桑南陌頭　十四　桑を採る　南陌の頭
十五嫁為盧家婦　十五　嫁して盧家の婦と為り
十六生児字阿侯　十六　児を生む　字は阿侯

盧家蘭室桂為梁　盧家の蘭室　桂を梁と為し
中有鬱金蘇合香　中に有り　鬱金　蘇合の香
頭上金釵十二行　頭上の金釵　十二行
足下糸履五文章　足下の糸履　五文章
珊瑚掛鏡爛生光　珊瑚　鏡を掛けて　爛として光を生じ
平頭奴子提履箱　平頭の奴子　履箱を提ぐ
人生富貴何所望　人生の富貴　何の望む所ぞ
恨不嫁与東家王　恨むらくは　東家の王に嫁せざりしを

六句目までに美しい女性「莫愁」の生い立ちが語られ、七句目から十二句目までに、嫁いだ後のきらびやかな生活が描かれている。ところが末尾の二句に至って、「人生の富貴　何の望む所ぞ、恨むらくは　東家の王に嫁せざりしを」と、その豪奢な生活よりも、若い頃好きだった男に嫁ぎたかったと嘆くのである（なお、ここで「恨不嫁」という表現がされていることも影響して、張籍の「何不相逢未嫁時」の句が「恨不～」となったのではないだろうか）。

「洛神賦」の場合、曹植と甄皇后の悲恋を背景に置きながら読めば（唐代の詩人も同じように読んだであろう）、若い頃に出逢いたかったということばは、深い悲しみを湛えた悔恨のことばとなっているといえよう。ただ、この賦の語り手は神女に出会った男性の側であり、このことばも間接話法で語られている。また、末尾に近い部分とはいえ、長い賦の途中にあって、この女性のことばもさほど強い印象を残すものとはいえないようだ。

「河中之水」の場合は、語り手は女性であり、かつての恋人と結婚したかったという思いは、詩の末尾に直接話法で語られていて余韻を残しているが、男性に向かって語られたことばではなく、女性のモノローグとなっている。そのためか、何不自由なく暮らす女性がふと感じた寂しさというような印象があることは否めず、富貴についての句も、別に富貴でなくてもかまわないというような軽い意味で用いられているように思われる。例えば石川忠久氏『玉台新詠』（学習研究社『中国の古典』25）が、「有閑夫人の痴態」を描いた作品とするような解釈もこの辺りから生まれるものであろう。

これらに対して、「節婦吟」では語り手が女性であり、末尾の二句は女性の口から男性に向かってストレートに語られ、強い印象を残している。夫の富貴は女性を縛る強力な足かせとなっており、相手のくもりない思いとは対照的に、現実的に考えればそこから抜け出せないという打算的な考えを巡らせざるを得ない状況が、苦い悔恨の思いと結びついていよう。

「節婦吟」は、こういった点で、先行作品を消化しつつ新たな工夫を加えた作品といえるのではないだろうか。

三　作品の評価と作詩の背景について

この作品に関しては、詩に登場する女性が「節婦」といえるかどうかということを中心に、さまざまな評価がなされている。李建崑注に詩話等における評価が多数集められているので、清朝以前の評価については詳しくはそちらを参照いただきたいが、単純に夫のもとに残ったから節婦であるとするものもあれば、最後の二句に明らかなように節婦でないとするものもあり、また、相手に好意を抱きながら感情を抑えて夫のもとに止まり、節婦という皮肉な名称を手に入れたのだとするものもある。

このことと関わるのが、作詩背景である。【題解】に述べたように、節度使の招聘を断る作とされることにより、そもそも節婦かどうかという議論がなりたたないとするもの、作詩背景の方に重点を置き、節度使の招聘を毅然と断った張籍を高く評価するもの、節婦のためらいの描写は礼を以て辞退したもので、自己の感情を率直に述べつつ理性で抑えたとするものもある。また、作品は作者を離れて一人歩きするものとして解釈する立場のものもあれば、愛情の詩と功利的な詩の両面を併せ持つものとするものもある。

多くの人々がいろいろな立場から論じているように、この作品の解釈・評価についてはそれぞれの読者にゆだねられるべきであろうが、管見の及んだ最近の論文の中に、やや異なる観点からこの詩を考察しているものがあるので、最後にそれを紹介しておくこととしたい。

一つは松原朗氏の「盛唐から中唐へ—楽府文学の変容を手掛かりとして—」（『中国詩文論叢』第一八集、一九九九年）で、この作品を楽府の展開の中で位置づけ、作品本文では場面の客体化が行われながら、原注によって一人称的作品と転化されるという、作品と原注との新たな関係を示した作品としておられる。

もう一つは川合康三氏の「『母胎文学』の構想—中国の恋愛文学を手がかりに—」（『中国の文学史観』所収、創文社、二〇〇二年）で、「節婦吟」が唐王朝への忠誠と敵対勢力への拒絶を語るのに男女関係を借りていることを糸口にして、現存する作品群の背後にかつて存在していた「母胎文学」の姿を考察されている。

いずれも「節婦吟」に関する専論ではないが、文学史的な視野からこの作品の内容と作詩背景の関係を見直す卓論であり、そういった考察を引き出しうるという点からも、「節婦吟」は非常に重要な作品といえるかもしれない。

（橘）